兵庫県立芦屋高等学校オープンカレッジ－ジャズ文化と出会おう！
第７回ジャズと芸能

2016.1.16
岡村正史

1、戦前　ジャズ＝ポピュラーソング

●二村定一
●榎本健一
●ディック・ミネ　「ダイナ」（1934）黒人っぽい歌い方（ファッツ・ウォーラーの影響）
●服部良一　サウンド面ではいろいろ取り入れるが、フレージングは日本的。
●あきれたぼういず（川田義雄、坊屋三郎、芝利英、益田喜頓）「ジャズ漫芸」
●宝塚歌劇　「シング・シング・シング」を録音（1937年４月。Ｂ・グッドマンより数か月早い）
●「軽音楽改革」＝ジャズ弾圧（1944）

2、戦後　1950年代まで、ジャズはポピュラーソングの意（戦前の延長）

●日本のスイング・エイジは遅れて成立（ダンス・ホール、ビッグバンド）1950年代前半まで。
●笠置シヅ子･･･「東京ブギウギ」ビッグバンドのアレンジ　「子供と動物にはかなわない」
●三人娘（美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみ）ひばりのｱﾚﾝｼﾞは戦前回帰→ﾋﾞｯｸﾞﾊﾞﾝﾄﾞ衰退へ
1952　ジーン・クルーパー・トリオ来日　→　1952～1953　ジャズコンブーム
1953　ビッグ・フォー結成（ジョージ川口（d）、松本英彦（ｔｓ）、小野満（b）、中村八大（p））
「ドラム・ソロの場面になると、プロのダンサーたちは踊れないのでいやな顔をした」（川口）
1953　JATPオールスターズ来日･･･オスカー・ピーターソン（p）の椅子の足が壊れる。→ハプニングが受ける→演奏＋笑い（ハナ肇がコメディアンに憧れるきっかけ）
1961　アート・ブレーキーとジャズ・メッセンジャーズ来日→モダンジャズ全盛へ→外国人ミュージシャンブーム→「日本人ジャズメンの生活を圧迫」（川口）

●テレビ放送開始

1953.2.1　ＮＨＫ　1953.8.28日本テレビ（ＮＴＶ）1955.4.1ラジオ東京（現ＴＢＳ）
1959.2.1　ＮＥＴ（現テレビ朝日）1959.3.1フジテレビ　1964.4.12東京12チャンネル（現テレビ東京）

●フランキー堺（1929～1996）

（小林信彦『日本の喜劇人』新潮文庫、一九八二より）

1951　慶応大学法学部卒業。在学中から演劇部、ジャズドラマーとして活躍。
1954　シティ・スリッカーズ結成（植木等、谷啓、桜井センリら参加）
※スパイク・ジョーンズ（米）の「冗談音楽」のコピーバンド
堺「クラシックや、普通のジャズを聞いてると、あのキレイな音の流れをブチこわしたくなる」　ファンは「都会的なセンスをもった層、インテリ」（週刊朝日）
1955　日活と契約、映画俳優に。代表作「幕末太陽伝」（川島雄三監督、1957、ブルーリボン賞受賞）
1956　未来のテレビ・スターとして注目される
※「だれがテレビ・スターか」（週刊朝日4.1）Ｆ堺80点、有島一郎75点、宮城まり子75点
1958　テレビドラマ「私は貝になりたい」主演。テレビドラマが感動を呼ぶことを実証。
シティ・スリッカーズ解散

●映画「嵐を呼ぶ男」（1958年正月映画。日活、井上梅次監督）

石原裕次郎がジャズドラマーを演じ、大スターとなった作品。敵役（笈田敏夫）とのドラム合戦は、G川口とF堺のドラム合戦がモデル。また、ストーリー自体はビッグ・フォーが日劇で旗揚げ公演を行った際の興行をめぐる縄張り争いがモデルと言われている。北原三枝が演じたマネージャーのモデルは渡辺プロの渡辺美佐である。合戦の前日に腕を負傷した裕次郎が、「俺らはドラマー　やくざなドラマー　俺らがおこれば嵐を呼ぶぜ　喧嘩代わりに　ドラムを叩きゃ　恋のうわさも　ふっとぶぜ」と歌う場面は有名。この作品では、クラシック系作曲家の純粋な兄とのコントラストで、ジャズが「やくざな」世界として描かれている。また、平尾昌章によるプレスリーばりの「ロカビリー」も「ジャズ」として描かれている場面があり、依然「ジャズ」が曖昧な概念として使用されている。

1958年は日本映画史上観客動員数が最高の年。ちなみに、同年フランス映画「死刑台のエレベーター」が封切られ、モダンジャズ（マイルス・デイヴィス）とサスペンス作品のカップリングが鮮烈な印象を与えた。1959年以降、映画の観客動員数は下降していったものの、テレビの地位はいまなお低く、60年代を通してテレビと映画の力関係は逆転していったと考えられる。映画会社専属制のスター・システムが崩壊し、いわゆる五社協定（専属俳優のテレビドラマ出演を制限）が自然消滅したのは1971年のことである。1969年にテレビで26回放送された「男はつらいよ」が映画化された際、なぜテレビでやったドラマをわざわざ映画にするのか松竹で異論が続出したという。テレビに対する映画人の偏見には根強いものがあった。

●渡辺プロダクション（ナベプロ）

1955年創業。創始者・渡辺晋（ジャズベーシスト）と渡辺美佐夫妻。

従来芸能プロの形は、①レコード会社、映画会社の一部門、②師匠と内弟子の組織（浪曲、演歌）、③大物タレントと個人マネージャー、④「神戸芸能」のような独立系芸能プロ、のいずれかであったが、ジャズミュージシャンは①～④のいずれでもなく、米軍基地内のクラブとの直接契約だった。したがって、渡辺プロの創業は渡辺晋いわく「ジャズメンに対する救済事業」という意味合いがあった。1955年はジャズコンブームが完全に終焉し、ジャズは低迷していた。

発足時の所属タレントは渡辺晋とシックス・ジョーズ、ハナ肇とキューバン・キャッツなど。キューバン・キャッツにはハナ肇(d)、犬塚弘(b)、萩原哲晶（as）がいた。

渡辺プロは月給制を採用し、やくざとの決別を目指して販促興行を多く実施した。これは広告代理店が仕切り、企業が商品の宣伝のために各地の公民館、中学校体育館を借りて行った興行である。

渡辺プロがブレークしたのは日劇ウエスタンカーニバル（1958）で、美佐がロカビリーに対する若者の熱狂を演出し、大成功をおさめた。戦後初めて10代の若者が消費者になったのである。渡辺プロには新しい歌手に投資する余裕が生まれ、ザ・ピーナッツをはじめ中尾ミエ、伊東ゆかり、園まり、そしてクレージー・キャッツなどテレビ向きのタレントを輩出した。

「ザ・ヒットパレード」（1959　フジ）はナベプロの自主制作で、フジテレビから直接制作費が入り、仲介業専業から脱却できた。また、テレビ局とつきあうことによって都市銀行と取引ができるようになったのである。また、1961年の「スーダラ節」（詞・青島幸夫、曲・萩原哲晶）は芸能プロがレコード原盤を制作した第一号であり、レコード会社が所有していたレコード原盤権を獲得し、芸能プロが知的財産産業に踏み出す第一歩となった。

●ハナ肇とクレージー・キャッツ

前述のキューバン・キャッツが1955年頃に改名。1957年にシティ・スリッカーズから植木等が移籍して、メンバーが固まった。ハナ肇(d)、植木等（g,v）、谷啓（tb）、犬塚弘(b)、石橋エータロー（p）、安田伸(ts,cl)。後に、石橋が入院して、桜井センリ(p)が加入。石橋復帰後は桜井と二人ピアノ。石橋は71年に離脱。

1957年頃までは米軍キャンプが仕事の中心だったが、1958年頃よりテレビに進出し、「おとなの漫

画」（フジ、1959）のレギュラーとして人気が出た。同番組のディレクターはすぎやまこういちで「優れたコメディアンは音楽のリズムを理解している」という言葉を残している。放送作家には青島幸夫、永六輔がいた。

1961年より「若い季節」（ＮＨＫ）に出演。そして、人気を決定づけたのが「シャボン玉ホリデー」（ＮＴＶ、1961～1972）だった。とりわけ、「スーダラ節」の成功は「無責任男」としての植木の人気を決定的なものにし、1962年の「ニッポン無責任時代」を皮切りにクレージー・キャッツ総出演の東宝映画は70年代初頭まで続くことになる。

※「シャボン玉ホリデー」エンディングテーマ「スターダスト」作曲者ホーギー・カーマイケルのエピソード♪

（小林信彦『日本の喜劇人』新潮文庫、一九八二より）

●アンチナベプロの動き

60年代の芸能界に権勢を誇り、「ナベプロ帝国」とまで言われた渡辺プロに反旗を翻したのは日本テレビ音楽班の有志であり、阿久悠であった。彼らは1971年に「スター誕生」（ＮＴＶ）を立ち上げ、この番組をホリプロ、サンミュージック、田辺エージェンシーへのタレント供給源としたのである（各プロの創業者、堀武夫（g）、相沢秀禎(sg)、田辺昭知(d)はいずれもウエスタン・バンド出身である）。森昌子をはじめ、桜田淳子、山口百恵らアイドルを次々に誕生させたこの番組の成功を見た渡辺晋はＮＥＴでオーディション番組を開始しようとするが、放送時間帯がＮＴＶの「紅白歌のベストテン」と重なることがわかった。そこで、ＮＴＶの名物プロデューサー井原高忠が渡辺の翻意を求めて説得するが、渡辺は井原に「そんなにウチのタレントがほしいのなら、日本テレビの『紅白歌のベストテン』が放送日を替えりゃいいじゃないか」と言い放った。世に言う「日テレ・ナベプロ戦争」の勃発である。対抗心を燃やした井原がナベプロ抜きでもお笑いバラエティはできると仕掛けたのが、「金曜10時！うわさのチャンネル」（1973～1979）であり、ホリプロなどアンチナベプロ三派のタレントが登場（和田アキ子、せんだみつお、ザ・デストロイヤーら）し、高視聴率を獲得した。なお、この番組で実質的に全国区デビューを果たしたのがタモリである。

また、紅白歌合戦を見ると、60年代前半まで洋楽の比率が比較的高かったが、60年代後半のグループサウンズ（ＧＳ）ブームを経て、70年代以降演歌、アイドル、J-POP（ＧＳ、フォーク、ロック→ニューミュージック）の三極構造になっていき、洋楽の出る幕はなくなってきたといえる。

●タモリと「今夜は最高！」

1963年、高校3年生のときにアート・ブレーキーとジャズ・メッセンジャーズを聴いて衝撃を受けた森田一義は早稲田大学でモダンジャズ研究会に属し、ＭＣとして活躍。大学除籍後福岡に戻ってサラリーマンとして生活していたが、27歳のときに山下洋輔トリオら一行の福岡公演の打ち上げに突如として「乱入」し、山下に強烈な印象を残した。3年後、山下は東京に彼を呼び寄せ、なじみの店でネタを披露させた。やがて赤塚不二夫家の居候となったタモリは妻も呼び寄せた。「密室芸人」として伝説化していったタモリはテレビに進出するも、「金曜10時！うわさのチャンネル」ではカルト的な存在の域を出なかった。彼が一般的な存在となったのはもちろん「笑っていいとも」（フジ、1981～2014）であったが、タモリが本来持っているジャズ志向性が色濃く表現された番組として「今夜は最高！」（ＮＴＶ、1981～1989）を取り上げたい。この番組の形式は60年代の「シャボン玉ホリデー」に依拠しており、同番組へのリスペクトが感じられる。音楽バラエティとして、映画、ミュージカル、ドラマ等のパロディに満ち、そして、味付けはよりモダンジャズっぽくなっている。

【参考】「今夜は最高！」1986年3月1日放送

「桃太郎　モダンジャズオペラ」出演　タモリ、マリーン、団しん也、斎藤晴彦ほか

① Now's The Time　チャーリー・パーカーより／② Lotus Blossom　ケニー・ドーハムより／③Milestones　マイ

ルス・デイヴィスより／④ Misterioso セロニアス・モンクより／⑤Blue Monk セロニアス・モンクより ⑥ Sister Sadie ホレス・シルヴァーより／⑦Walts For Debby ビル・エヴァンスより／⑧危険な関係のブルース アート・ブレーキーとジャズ・メッセンジャーズより／⑨Blues March アート・ブレーキーとジャズ・メッセンジャーズより／⑩Doxy ソニー・ロリンズより／⑪Five Spots After Dark ベニー・ゴルソンより／⑫Cleopatra's Dream バド・パウエルより／⑬Comin' Home Baby ハービー・マンより／⑭処女航海 ハービー・ハンコックより／⑮Donna Lee チャーリー・パーカーより／⑯Cherokee クリフォード・ブラウンより／⑰Fables of Faubus チャーリー・ミンガスより／⑱Round Midnight マイルス・デイヴィスより／⑲Moment's Notice ジョン・コルトレーンより／⑳St.Thomas ソニー・ロリンズより

紅白歌合戦におけるジャズ系も含む洋楽楽曲

回	年	出場歌手(組)数	関西の世帯視聴率 ( ) 内は関東	歌手・曲目
2	1952 (昭和27) 1月3日開催	24	—	笠置シヅ子／買物ブギ 越路吹雪／ビギン・ザ・ビギン
3	1953 (昭和28) 1月2日開催	24	—	荒井恵子／ポカピカパカ 笠置シヅ子／ホームランブギ 二葉あき子／パダム・パダム 久慈あさみ／ボタンとリボン 高英男／ロマンス ディック・ミネ／キッス・オブ・ファイヤー
4	1953 (昭和28) この回より 12月31日、 テレビ開始	34	—	江利チエミ／ガイ・イズ・ア・ガイ 笠置シヅ子／東京ブギウギ 三味線豊吉／カモン・ナ・マイハウス 笈田敏夫／ばら色の人生 浜口庫之助／国境の南
5	1954 (昭和29)	30	—	江利チエミ／ウスクダラ 雪村いづみ／オー・マイ・パパ 二葉あき子／**パダム・パダム** 浜口庫之助／セントルイス・ブルース・マンボ 高英男／**ロマンス** 笈田敏夫／愛の泉
6	1955 (昭和30)	32	—	ペギー葉山／マンボ・イタリアーノ 長門美保／ハバネラ 宝とも子・浜口庫之助／インディアン・ラブコール 柴田睦陸／ラ・クンパルシータ 芦野宏／タブー 笈田敏夫／**恋とは素晴らしいもの** ディック・ミネ／ダイナ
7	1956	49	—	生田恵子／アイ・アイ・バンジョー

	(昭和31)	※雪村いづみ急病で欠場のため奇数。		宝とも子・高英男／セ・シ・ボン 中原美佐緒／フルフル 越路吹雪／哀れなジャン ペギー葉山／ケ・セラ・セラ 笠置シヅ子／ヘイ・ヘイ・ブギ 芦野宏／ドミノ 小坂一也／ハート・ブレーク・ホテル ディック・ミネ／**私の青空** 笈田敏夫／ハイ・ソサエティ・カリプソ 旗照夫／**恋とは素晴らしいもの**
8	1957 (昭和32)	50	—	江利チエミ／ヤムミー・ヤムミー 中原美佐緒／ジェルソミーナ 雪村いづみ／ビー・バップ・ア・ルーラ ペギー葉山／シャンテ・シャンテ 笈田敏夫／**アレキサンダーズ・ラグタイム・バンド** 芦野宏／メケメケ 高英男／ブン ジェームス繁田／魅惑のワルツ
9	1958 (昭和33)	50	—	雪村いづみ／ヤキティ・ヤック 越路吹雪／マ・プティット・オンリー 水谷良重・東郷たまみ・沢たまき／**アレキサンダーズ・ラグタイム・バンド** 石井好子／ゴンドリエ 淡谷のり子／**ばら色の人生** ジェームス繁田／ヴォラーレ 笈田敏夫／オール・ザ・ウェイ ディック・ミネ／**私の青空**
10	1959 (昭和34)	50	—	雪村いづみ／**スワニー** 朝丘雪路／シング・シング・シング ザ・ピーナッツ／情熱の花 水谷良重／キサス・キサス・キサス 中原美佐緒／或る恋の物語 宝とも子・有明ユリ・藤崎世津子／シェリト・リンド 藤沢嵐子／ベサメ・ムーチョ 石井好子／小さな花 越路吹雪／パリ・カナイユ 芦野宏／チャオ・チャ・バンビーナ 旗照夫／**マック・ザ・ナイフ♪** 武井義明／国境の南 笈田敏夫／プリテンド
11	1960	54	—	宝とも子／カチート

	(昭和 35)			水谷良重／イッツ・ナウ・オア・ネバー ザ・ピーナッツ／悲しき１６才 有明ユリ・小割まさ江・沢たまき・高美アリサ／**或る恋の物語** 藤沢嵐子／ジーラ・ジーラ 越路吹雪／うちへ帰るのが恐い 石井好子／黒いオルフェ ペギー葉山／マンマ 笈田敏夫／スターダスト 高英男／**ロマンス** 旗照夫／カリーナ ミッキー・カーチス／恋の片道切符 芦野宏／幸福を売る男 フランキー堺／悲しきインディアン アイ・ジョージ／マラゲーニア
12	1961 (昭和 36)	50	—	水谷良重／ベビート 中原美佐緒／ボーイ・ハント 雪村いづみ／**マック・ザ・ナイフ** 西田佐知子／コーヒー・ルンバ ペギー葉山／ブリア 江利チエミ／**スワニー** ザ・ピーナッツ／スクスク 寿美花代／ジャズ・バンド 越路吹雪／ラストダンスは私に 芦野宏／カナダ旅行 高英男／カミニート
13	1962 (昭和 37)	50	— (80.4)	弘田三枝子／ヴァケーション 中原美佐緒／フルフル 坂本スミ子／エル・クンバンチェロ 中尾ミエ／可愛いベイビー 江利チエミ／虹の彼方に ペギー葉山／トゥナイト スリー・グレイセス／ストライク・アップ・ザ・バンド 飯田久彦／ルイジアナ・ママ 芦野宏／カミニート 旗照夫／**私の青空** アイ・ジョージ／ク・ク・ル・ク・ク・パロマ
14	1963 (昭和 38)	50	81.5 (81.4)	雪村いづみ／想い出のサンフランシスコ♪ 坂本スミ子／テ・キエロ・デヒステ 越路吹雪／**ラストダンスは私に** スリー・グレイセス／アイ・フィール・プリティ

				江利チエミ／踊り明かそう 立川澄人／運がよけりゃ アイ・ジョージ／ダニー・ボーイ ボニー・ジャックス／一週間 ダーク・ダックス／カリンカ デューク・エイセス／ミスター・ベースマン 芦野宏／パパと踊ろう
15	1964 （昭和 39）	50	72.5（72.0）	弘田三枝子／**アレキサンダーズ・ラグタイム・バンド** 伊東ゆかり・園まり・中尾ミエ／夢見る想い 坂本スミ子／マラゲーニア ペギー葉山／ラ・ノビア 越路吹雪／サン・トワ・マミー 雪村いづみ／ショウほどすてきな商売はない 芦野宏／ほほにかかる涙 立川澄人／オー・ソレ・ミーオ ダーク・ダックス／アンジェリータ デューク・エイセス／A列車で行こう
16	1965 （昭和 40）	50	78.8（78.1）	雪村いづみ／**スワニー** ザ・ピーナッツ／ロック・アンド・ロール・ミュージック 朝丘雪路／ハロー・ドーリー 中尾ミエ／夢見るシャンソン人形 坂本スミ子／グラナダ 越路吹雪／夜霧のしのび逢い ジャニーズ／**マック・ザ・ナイフ** ダーク・ダックス／エーデルワイス デューク・エイセス／キャラバン 立川澄人／教会へ行こう
17	1966 （昭和 41）	50	78.3（74.0）	金井克子／ラバーズ・コンチェルト 岸洋子／想い出のソレンツァーラ 越路吹雪／夢の中に君がいる アイ・ジョージ／夜のストレンジャー
18	1967 （昭和 42）	46	77.7（76.7）	金井克子／ラ・バンバ 越路吹雪／チャンスが欲しいの 菅原洋一／知りたくないの
19	1968 （昭和 43）	46	79.2（76.9）	菅原洋一／奥様お手をどうぞ ダーク・ダックス／ラ・ゴロンドリーナ
20	1969 （昭和 44）	46	67.5（69.7）	越路吹雪／愛の讃歌 菅原洋一／潮風の中で アイ・ジョージ／**ク・ク・ル・ク・ク・パロマ**
21	1970 （昭和 45）	48	73.2（77.0）	アイ・ジョージ／リパブリック讃歌

22	1971（昭和46）	50	69.3（78.1）	ダーク・ダックス／白銀は招くよメドレー
23	1972 （昭和47）	46	74.4（80.6）	佐良直美／オー・シャンゼリゼ 尾崎紀世彦／ゴッドファーザー 菅原洋一／**知りたくないの** 布施明／**マイ・ウェイ**
24	1973 （昭和48）	46	67.6（75.8）	上條恒彦／シャンテ
25	1974 （昭和49）	50	64.2（74.8）	ザ・ピーナッツ／ブギ・ウギ・ビューグル・ボーイ 菅原洋一／ケ・サラ
26	1975 （昭和50）	48	68.0（72.0）	佐良直美／オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ 梓みちよ／リリー・マルレーン
27	1976 （昭和51）	48	68.8（74.6）	田中星児／ビューティフル・サンデー 菅原洋一／夜のタンゴ
28	1977 （昭和52）	48	70.7（77.0）	佐良直美／ラブ・ミー・テンダー～ハウンド・ドッグ しばたはつみ／マイ・ラグジュアリー・ナイト 菅原洋一／**奥様お手をどうぞ**
29	1978 （昭和53）	48	53.6（72.2）	サーカズ／Mr.サマータイム
31	1980 （昭和55）	46	64.2（71.1）	菅原洋一／**ラ・クンパルシータ**
32	1981 （昭和56）	44	71.5（74.9）	菅原洋一／慕情
33	1982 （昭和57）	44	58.5（69.9）	菅原洋一／**愛の讃歌**
35	1984 （昭和59）	40	63.1（78.1）	沢田研二／ＡＭＡＰＯＬＡ
37	1986 （昭和61）	40	54.9（59.4）	菅原洋一／小雨降る径
38	1987 （昭和62）	40	47.8（55.2）	岩崎宏美／夢やぶれて　I Dreamed a dream 佐藤しのぶ／オンブラ・マイ・フ 布施明／そして今は 菅原洋一／**ラ・バンバ**
39	1988 （昭和63）	42	54.9（53.9）	小柳ルミ子／愛のセレブレーション 島田歌穂／オンマイオウン 佐藤しのぶ／アヴェ・マリア タイム・ファイブ／星に願いを 菅原洋一／**ラ・クンパルシータ** 加山雄三／**マイ・ウェイ**
40	1989 （平成元）	54	48.4（47.0） この回より二部構成（第二部	島田歌穂／I Am Changing 佐藤しのぶ／ロンドンデリーの歌 市村正親／オペラ座の怪人より

			視聴率を示す)	
41	1990 （平成 2）	56	57.0（51.5）	シンディ・ローパー／I Drove All Night 佐藤しのぶ／**トゥナイト** EVE／**イマジン** ガリー・バレンシアーノ／I know What You Want 久保田利伸、アリスン・ウイリアムズ／Forever Yours アレキサンドル・グラツキー／ソング ポール・サイモン／明日に架ける橋
42	1991 （平成 3）	56	52.4（51.5）	アンディ・ウイリアムス／ムーン・リバー サラ・ブライトマン／**オペラ座の怪人** ザ・ベンチャーズ／十番街の殺人～ダイヤモンド・ヘッド～パイプライン
43	1992 （平成 4）	56	56.3（55.2）	荻野目洋子／**コーヒー・ルンバ** 伊東ゆかり／**ボーイ・ハント**
44	1993 （平成 5）	52	54.4（50.1）	オルケスタ・デ・ラ・ルス／サルサに国境はない
48	1997 （平成 9）	50	57.7（50.7）	由紀さおり・安田祥子／トルコ行進曲
49	1998 （平成 10）	50	55.9（57.2）	西田ひかる／**星に願いを**～ミッキーマウス・マーチ
53	2002 （平成 14）	54	48.6（47.3）	鈴木慶江／わたしのおとうさん ジョン健ヌッツォ／マリア
54	2003 （平成 15）	60	45.7（45.9）	綾戸智絵／テネシー・ワルツ
55	2004 （平成 16）	56	38.6（39.3）	平原綾香／Jupiter 布施明／**マイ・ウェイ**
57	2006 （平成 18）	54	37.6（39.8）	布施明／**イマジン**
58	2007 （平成 19）	54	39.5（39.5）	平原綾香／Jupiter
60	2009 （平成 21）	50	40.3（40.8）	スーザン・ボイル（特別参加）／**夢やぶれて　I Dreamed a dream** 布施明／**マイ・ウェイ**
65	2014 （平成 26）	54	43.3（42.2）	May.J.／Let It Go イディナ・メンゼル、神田沙也加／**Let It Go** 美輪明宏／**愛の讃歌**

主要参考文献

阿久悠『夢を食った男たち』文春文庫、2007 年

色川武大『唄えば天国ジャズソング　命から二番目に大事な歌』ミュージックマガジン、1987 年

大田省一『紅白歌合戦と日本人』筑摩書房、2013 年

鴨下信一『誰も「戦後」を覚えていない[昭和 20 年代後半篇]』文藝春秋、2006 年

高護『歌謡曲』岩波新書、2011年
小林信彦『日本の喜劇人』新潮文庫、1982年
小林信彦『テレビの黄金時代』キネマ旬報社、1983年
小林信彦『テレビの黄金時代』文藝春秋、2002年
近藤正高『タモリと戦後ニッポン』講談社現代新書、2015年
ジョージ川口『人生は4ビート！ジョージ川口自伝』文化出版局、1982年
瀬川昌久、大谷能生　『日本ジャズの誕生』青土社、2009年
高平哲郎『今夜は最高な日々』新潮社、2010年
田原総一郎『メデイアウォーズ』講談社文庫、1993年
玉川しんめい『ぼくは浅草の不良少年』作品社、1991年
戸井十月『植木等伝「わかっちゃいるけど、やめられない」』小学館、2007年
戸部田誠『タモリ学』イースト・プレス、2014年
野地秩嘉『芸能ビジネスを創った男　渡辺プロとその時代』新潮社、2006年
フランキー堺『芸夢感覚』集英社、1993年
文藝別冊『タモリ』河出書房新社、2014年
マイルス・デイヴィス『マイルス・デイヴィス自叙伝』宝島社文庫、2000年
マイク・モラスキー『戦後日本のジャズ文化』青土社、2005年
マイク・モラスキー「ジャズが流れる昭和三〇年代ー音・映像・文字」『文学』2008年3･4月号
マイク・モラスキー『ジャズ喫茶論』筑摩書房、2010年
ユリイカ『戦後日本のジャズ文化』青土社、2007年
読売新聞芸能部編『テレビ番組の40年』ＮＨＫ出版、1994年
輪島裕介『創られた「日本の心」神話』光文社新書、2010年
輪島裕介『踊る昭和歌謡』ＮＨＫ出版新書、2015年
和田誠『ビギン・ザ・ビギン』文藝春秋、1982年
「オール読物」1954年4月号
「週刊朝日」1954年8月8日号、1956年4月1日号、1985年4月5日号～8月23日号
「週刊現代」1959年11月22日号
「週刊公論」1959年11月24日号～1959年12月8日号
「週刊平凡」1964年3月26日号～4月23日号
「週刊明星」1959年12月6日号
「週刊読売」1955年3月13日号
「放送文化」1955年9月号

講師プロフィール

岡村正史（おかむら・まさし）1954年三重県生まれ。ほどなく神戸市に移住。1976年同志社大学文学部文化学科文化史学専攻卒業。1980年同志社大学大学院文学研究科修士課程修了。1980年より兵庫県高校教諭（社会科）。芦屋高校には2009年度～2013年度勤務（本名、岡田正）。2014年定年退職。2002年編著『力道山と日本人』（青弓社）により橋本峰雄賞受賞。2009年『ミネルヴァ日本評伝選　力道山』（ミネルヴァ書房）により兵庫県高等学校教育研究会社会部会研友会賞受賞。2010年大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。2014年9月より神戸学院大学人文学部非常勤講師として「歴史文化特別講義」を担当した。近作に「力道山ーヒーローと偏見」（『ひとびとの精神史』第二巻『朝鮮の戦争』所収、岩波書店）

1997年頃よりジャズヴォーカルを習い、2012年より呉川ウォークブリッジとしての活動を開始。YouTubeにプロモーション・ビデオをアップ中。

●写真はいずれも小林信彦『日本の喜劇人』新潮文庫より。

上を向いて歩こう

作詞：永六輔
作曲：中村八大

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
思い出す春の日
一人ぼっちの夜

上を向いて歩こう
にじんだ星を数えて
思い出す夏の日
一人ぼっちの夜

幸せは雲の上に
幸せは空の上に

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
泣きながら歩く
一人ぼっちの夜

思い出す秋の日
一人ぼっちの夜

悲しみは星の影に
悲しみは月の影に

上を向いて歩こう
涙がこぼれないように
泣きながら歩く
一人ぼっちの夜
一人ぼっちの夜

【解説】

「上を向いて歩こう」はＮＨＫの「夢であいましょう」というバラエティ番組から生まれた。「今月のうた」というコーナーで 1961 年 10 月、11 月の歌として取り上げられ、坂本九はこの年「紅白歌合戦」に初出場を果たした。テレビがヒット曲を生む時代となったのである。この曲はタイトルを「SUKIYAKI」に変更されて、アメリカのビルボード誌でチャート 1 位をマークするなど世界的な成功を収めた。メジャーコードではじまり、サビでマイナーとなって、再びメジャーへ戻る。永六輔によると、こういう転調は日本では珍しく、海外で高く評価されたという。60 年安保闘争後の挫折感を描いた永の口語的な詞とジャズをベースとする中村八大の楽曲のコンビネーションはすでに「黒い花びら」（1959 年。第一回日本レコード大賞受賞、水原弘歌唱）で成功を収めていた。アメリカ的な文化をベースにして日本的な情緒（外国から見ればエキゾチシズム）を表現する試みをここに見ることができる。

（太田省一『紅白歌合戦と日本人』筑摩書房、2013 年、にもとづいて記述しました。）